



シリーズ! 活躍する2019年度日本ITU協会賞奨励賞受賞者 その1

いしい みなみ
石井 美波

一般社団法人電波産業会 研究開発本部 移動通信グループ
ishii@nttdocomo.com
<https://www.arib.or.jp/>



2016年から日本代表団の一員としてITU-R WP5Dの全7会合に参加。IMT-2020等に関するITU-R勧告・レポートの策定、改訂の促進及び日本提案の勧告・レポートへの反映に貢献。今後、ITU-R以外の会合でも国際標準化活動への貢献が期待できる。

ITU-R WP5Dでの日本代表団事務局活動

この度は、日本ITU協会賞奨励賞を表彰いただき、誠にありがとうございました。これもひとえに電波産業会並びにITU-R WP5D日本代表団の関係者の皆様のご指導のたまものと、感謝いたしております。

2016年、ITUではIMT-2020という名称で呼ばれる第5世代移動通信システム(5G)の標準化作業を行っており、回章5/LCCE/59 IMT-2020において、地上系のIMT-2020無線インタフェースの技術候補の提案を広く呼びかけました。これを受けて、日本国内でもIMT-2020無線インタフェースの技術候補の提案募集を行いました。

国内各社は、3GPPにおいて5Gの仕様作成の初期段階から積極的に参画していましたので、当初、国内から3GPP以外の無線インタフェース提案は出てこないと予想していました。しかし、その場合でも、第3及び第4世代移動通信システムでは日本からITUに提案入力を行ってきたのに対し、今回は提案入力を行わないこととした場合の懸念、一方、提案入力することとした場合、3GPPの無線インタフェース提案と差分があるのか、差分がない場合、何をもって提案とするのか、また、他国の提案に対する対応方針案の策

定など、様々な対応の検討が必要となりました。加えて、当初想定していなかった、要素技術に関する提案の入力もありましたので、この提案の対処についても併せて検討する必要がありました。

上記の対応を進めていく中で、会合出席者の主張やその主張の背景を十分に聞き、相手の立場を理解した上で議論を進めることの重要性を学びました。

また、相手の立場を尊重しつつも、その主張を互いに聞き入れることができない場合もありました。しかし、そのような場合でも、日本代表団を含めた経験豊富な方々が、過去の進め方や、その経緯、現在の状況等を共有し、参加者間で議論を重ねていくことで双方の態度が徐々に軟化し、建設的な代替案を提案することで、平行線をたどっていた議論を前進させることができることも学びました。

異動のため、IMT-2020無線インタフェースの策定まで本活動を継続することはできませんでしたが、ITU-R WP5Dでの日本代表団事務局活動で得た上記の経験を活かし、今後、国際標準化・国際協調等に貢献していきたいと考えています。



いちかわ えいいちろう
市川 栄一郎

東日本電信電話株式会社 東京オリンピック・パラリンピック推進室
eiichiro.ichikawa@east.ntt.co.jp
<https://www.ntt-east.co.jp>



青年海外協力隊として2年間ジャマイカでのICT人材育成に従事。JICA沖縄国際センターでは3年半にわたり世界各国からの研修生に対して技術指導を実施し、当該国のICT普及に大いに貢献。今後も経験を活かし、国際協力案件の形成が期待される。

ICT人材の育成活動を通じた国際協力

この度は、日本ITU協会賞奨励賞を頂き、大変光栄に存じます。日本ITU協会並びに、ご指導・ご鞭撻いただきました関係者の皆様に、厚く御礼申し上げます。

私とICTを通じた国際協力の関わりは、2000年12月から2年間参加したJICA青年海外協力隊からです。ジャマイカの教員養成短期大学のICT科に派遣され、ネットワークにつながっていなかったラボのPCをインターネットに接続するLAN環境の構築とその後の維持管理を行いました。構築時には、現地の同僚に必要性・利便性を説明し、協力してもらうことができました。そして、構築後はラボにICT科以外の学生も多く訪れ、文献調査やレポート作成にインターネットを積極的に活用するなど、ネットワークの利便性や重要性を感じてもらうことができました。

2005年からは3年半にわたり、NTT東日本国際室に所属し、JICA沖縄国際センターにてコンピュータコースでのインストラクター業務に従事しました。本コースには、プロジェクト管理、プログラミング、ネットワーク、情報セキュリティなど8つのサブコースがあり、私はネットワークコースのリーダーとして企画、講義、コースの全体運営をしました。特に、研修員が帰国後に日本で習得した知識・スキルをどう活用

するかというアクションプランの策定に力を注ぎました。

現地の状況は研修員に一から説明してもらう必要がありますが、私は研修員と何度も打合せをして課題について議論し、実現可能性を高めるために具体的な計画にしていきました。そして研修員の帰国後も連絡を取り合いながら、研修員が経験を活かして現地で活躍してくれるように支援してきました。帰国研修員とは現在もSNS等でつながり、友人としての関係が続いています。

その後、2014年から再びNTT東日本国際室で国際協力案件の創出に取り組みました。案件を創りあげるとは多くの困難がありましたが、異動の直前にブータンの防災関連案件の創出に携わり、現地の人たちとの強い信頼関係でつながる現地専門家、日本及び現地のJICA、NTT東日本関係者の思いが繋がってプロジェクト案件化のきっかけを創ることができました。

振り返ってみると、現地の人たちとの信頼関係とプロジェクトに参画する関係者の熱い思いが周囲を動かし、国際協力プロジェクトを成功に結び付けていると思います。今後も現地との人間関係を大事にしながらいきたく思います。